

神奈川近代文学館30年誌

1984—2013

神奈川近代文学館30年誌

1984-2013

公益財団法人神奈川文学振興会
1982-2013

公益財団法人神奈川文学振興会

平坦な道ではない

辻 原 登

県立神奈川近代文学館は 1984 年に全面開館した。館の運営に当る財団法人神奈川文学振興会の設立はさらに二年半ほどさかのぼる。

文学館の設立を発起し、その建設と運営に当って来られた先人の方々に対する私たちの尊敬と感謝の念の強さ、深さは言葉に尽くせない。

初代理事長・館長小田切進氏の館の建設趣意書中の一文に「超一級の文学殿堂に」とある。まさに、「文学・言葉の殿堂」である神奈川近代文学館は、言葉に尽くせない先人の方々への尊敬と感謝の念によって、「港の見える丘」に建っているのである。

同じ趣意書の中に、評議員の歌人馬場あき子氏の次のような一文もある。

横浜の「港の見える丘」に佇んで感慨深いのは、眼下に広がる港の景が見えるだけでなく、そこから上陸した近代日本文化を形成するさまざまなものや、その展開の筋みち、そして日本の近代そのものがみえてくるように思われる点であろう。この地に神奈川近代文学館が建設されることに深い意味を見つめないではいられない。

その深い意味をみつめて三十年がたった。

開館後の十年は所蔵資料の充実に、続く十年は資料の利用面の整備化、そして現在に至る十年は“開かれた文学館”をスローガンに、展示会の充実と教育現場との恒常的交流に力を注いできた。また 2006 年には指定管理者制度の導入があった。

一步一步、地を踏みしめて進んできた三十年に、今、新たな一步が加わろうとしている。それは決して平坦な道ではない。

(県立神奈川近代文学館館長・
公益財団法人神奈川文学振興会理事長・作家)

新たな創造に向けて

紀 田 順一郎

神奈川近代文学館が開館 30 周年を迎えた。日本文化の中で文学が重要な意味をもつことに変わりはないが、文化環境の変化を経験しつつある時期だけに、三十年の意味は重いといえよう。

「文学は人間と無限とを研究する一種の事業なり」というのは北村透谷のことばであるが、その営為を物語る原稿や書画などの資料を収蔵し、文学者の全体像をはじめ、時代背景にいたるまでを浮かび上がらせること、さらにはここを拠点として展覧会、講演会その他の文学活動を行うことも、また大事業たることをまたない。高度成長時代を中心に全国各地に出現した文学館は、いずれもこのような文化的創造と地方文化振興の要請を受けて誕生したものであるが、わけても当館はその独自の役割を果たすべく、文学界はもとより、広く文学に関心のある人々の力を結集し、成果をあげてきたといってよい。

つまり、これまでの文学館の歩みを振り返ると、所蔵資料の充実により、自ずから文学に志を有する人たちの精神的な拠点となってきたように思われる。昨今は電子的な手段を駆使した資料の公開なども緒についているが、三十年という節目を迎えるにあたって意識すべきことは、全国有数の公共文化施設としての、より積極的な活動が求められているということではあるまいか。その背景に、メディアの急速な変化による活字文化の衰退が、文学読者の育成を阻んでいるという状況があることはいうまでもない。教育施設との連携により、若い人々の目が文学に向くよう、創造的な提案を行うことも、次なる 40 周年に向けての文学館の一大目標といえないだろうか。

(前県立神奈川近代文学館館長・
前公益財団法人神奈川文学振興会理事長・作家)

開館 30 周年を迎えるに当たって

安 西 篤 子

1981 年に神奈川県教育委員になった私は、長洲一二知事に会う機会が多かった。ある時、知事が「神奈川県に近代文学館ができますよ」と云われ、私はたいそう嬉しかった。二十年ほど前、東京・駒場の加賀・前田邸の一角に、日本近代文学館ができ、そのころ、もの書きの端くれになりかかっていた私は、羨ましかった。こどものころ、代々木上原に住んでいた私は、駒場は通学路で、なじみがあった。あそこに文学館ができたのかと、感慨深かったのである。

ところが神奈川県にも文学館ができるという。喜ばずにはいられない。その後、自分が文学館と深くかかわりを持つようになるとは、夢にも思わなかった。

永く知事を勤めた長洲氏の業績は種々あろうが、神奈川近代文学館の創設こそ、第一の功績ではなかろうか。

文学館創設に当たっては、初代理事長を勤められた小田切進氏をはじめ、多くの文学者が尽力した。その方々の力が無ければ、いま見るような充実した文学館は、できなかったであろう。

けれども、文学者が文学館のために働くのは、当然のこととも云える。二代目理事長中野孝次氏が急逝され、その任期の残りを私が勤めた時、指定管理者制度という大問題が起こった。あの当時の不安と緊張は、いま思いだしてもゾットする。この制度はいまも五年毎に、役員の方々を悩ませているらしい。

しかし、役員の骨折もさることながら、私は、開館時に奔走された古山登氏、清水節男氏はじめ、事務局の方々の働きに、深く敬意を表したい。斉藤充氏、国正道夫氏の早逝が、まことに惜しまれる。あるいは過労のせいではなかったか。

デジタル化導入など、文学館の仕事も大きく変化しようとしている。開館 30 周年に祝意を表すると共に、文学館の未来のますますの充実を祈ってやまない。

(元県立神奈川近代文学館館長・
元財団法人神奈川文学振興会理事長・作家)

三十年おめでとう

三 木 卓

もう三十年たったのか、という思いと、いやもっともっと前からずっしりと存在していた、という思いが交錯する。しかし、設立にあたっての、はじめて県内文学者を招集する会には、ぼくも出席している。しかもそれは交通費をいただくという、予想外の小事件もついていて、もらっていいのかしら、自分たちの仕事のための事業なのに、というハプニングがついていた。ぼくは五十歳だったということになる。

時期としてはよかったのではないか。紙と文字印刷の集積という保存形態が、当然の時代だった。そのための最良の条件をそなえた本格的な文学図書館である。ぼくは周到的配慮のいきとどいた設備におどろいた記憶がある。この図書館なら、何がどう変わろうと不動なものとなるだろう、と、その推進者たちの思いの深さに感銘した。神奈川近代文学館は、今や日本国民の宝である。

この図書館に出入りするようになって、若いときに知った文学者のみなさんの晩年にも出会うチャンスがあった。中野孝次、岡松和夫、尾崎秀樹、上笙一郎氏などの姿が、図書館内でいきいきと活動していた。ぼくも今年八十歳になるが、かれらの若き日と晩年の姿が今つながって見える。ぼくもまた文学のひとつの時代にあったのだと、感慨深く思う。

(元財団法人神奈川文学振興会常務理事・
神奈川近代文学館懇話会会長・作家)

なお、百年を期すべし

山 田 宗 睦

われらの文学館が齢三十に達した。

創立者の中で長洲一二（当時県知事）、小田切進（初代館長）とは、若い時からの付き合いだった。長洲とはいわゆる構造改革論のグループで、小田切とは『改造』が廃刊されるので支援をと、東大出版会に私を訪ねてきて以来である。長い人生の中、時に場ちがいの所に身をおいたが、文学館もその一つである。小田切が急死し、次の館長を旧知の中野孝次に頼んだが、別れ際、手伝ってくれるんだろうなと念を押され、館とかかわることになった。

調べてもらったが、この三十年、特別展で取り上げた作家は 54 人、企画展で 26 人、計 80 人の近代作家展をもった。作家所持の図書、雑誌、原稿・書簡・色紙などの資料 118 万 6 千点を所蔵し、入館者は一昨年末で 91 万 6 千 385 人。二、三年中に 100 万人に達する。

館を支え運営する神奈川文学振興会は、延べ 211 人の作家、文学者たちと、少数精鋭、27 人の現事務局とからなる。文学館に関与して、私は、研究者たちが積みあげてきた文学史上の知を、展示つまり眼に見える形に作る文学デザインとでもいうべき、新しい文学探究の道が、文学館事務局の中でさぐられ、形成されてきたのに、感銘している。

中野と老子がいいと共感したが、その老子に、古ノ道ヲ執リテ、以テ今ノ有ヲ御ス、能ク古始ヲ知ル、の言がある。やや引きつけて言えば、文学研究の知を持ち、今所蔵する資料を展示に活かしたなら、文学の始原を知りうる。そう言えば、西の哲学者ハイデガーも言っていた、伝承ヲ、反復スルコトデ、現存在ニ、ソノ固有ノ歴史ガ現ワレ始メル、と。

浦辺鎮太郎設計の館は、港の見える丘公園の奥に、その品位風格を好ましく落ちつかせ、本館の角には、芸亭の桜が、年毎にその艶麗な花枝をひろげている。

既に三十年があった。また五十年、百年を期すべし、である。

(元財団法人神奈川文学振興会常務理事・
神奈川近代文学館懇話会幹事長・哲学者)

目 次

1. 開館 30 周年によせて	3
(辻原登、紀田順一郎、安西篤子、三木卓、山田宗陸)	
2. 主な所蔵資料 (カラー頁)	9
3. 神奈川近代文学館 30 年の歩み 1984 ～ 2013 (付・前史 1979 ～ 1983)	17
4. 神奈川近代文学館年表 1979 ～ 2013	91
5. 資料編	107
6. 沿 革	108
7. 公益財団法人神奈川文学振興会の概要	109
8. 財団法人 (現・公益財団法人) 神奈川文学振興会設立の趣意	110
9. 神奈川県立神奈川近代文学館条例	111
10. 神奈川県立神奈川近代文学館条例施行規則	114
11. 公益財団法人神奈川文学振興会定款	115
12. 神奈川県立神奈川近代文学館施設概要	120
13. 公益財団法人神奈川文学振興会役員等名簿	122
14. 神奈川近代文学館懇話会会員名簿	122
15. 公益財団法人神奈川文学振興会・歴代役員等名簿 (2011. 4. 1 ～)	123
16. 財団法人神奈川文学振興会・歴代役員等名簿 (1982. 4. 1 ～ 2011. 3. 31)	124
17. 組織等・職員名簿	131
18. 年間総利用者数の推移	132
19. 予算等	134
20. 神奈川近代文学館を支援 (サポート) する会 (2000.4 ～ 2014.3) 及び要綱	136
21. 理事会・評議員会等の開催	138
22. 資料収集・整理事業	139
23. 資料委員会の開催	140
24. 資料所蔵状況 (2014.3.31 現在)	141
25. 資料複製事業	142
26. 資料の館外貸し出し	143
27. 資料収集状況 (1982 ～ 2013 年度までに登録済みのもの)	144
28. 主な購入資料 (1982 ～ 2013 年度)	146
29. 主な寄贈資料 (1982 ～ 2013 年度)	148
30. 閲覧室	156
31. 展覧会事業	159
32. 展覧会別入館者状況 (1984 ～ 2013 年度)	160
33. 展示説明会及びギャラリートーク	165
34. 製作ビデオ一覧	167
35. 展覧会ポスター・チラシ (カラー頁)	169
36. 広報・普及活動事業	177
37. 講演会等 (講演会、講座、映画会ほか)	178
38. 子ども映画会・児童対象行事・かなぶんキッズクラブ事業	195
39. 神奈川近代文学館友の会の活動 (1986.4 ～ 2014.3)	200
40. 図書館等連携事業 (巡回パネル文学展等)	202
41. 学校教育連携事業・博物館実習・インターンシップ及び研修会	204
42. 共催・後援事業一覧	206
43. 文学展の制作・提供、文学資料の提供・研究協力、交付金事業等	215
44. 刊行物一覧	217
(展覧会図録・文庫目録・機関紙・年報等の刊行)	